

國學院大學學術情報リポジトリ

『完訳注釈 続日本紀』に導かれ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 史生, Tanaka, Fumio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000433

『完訳注釈 続日本紀』に導かれ

田中 史生

私は、自宅書齋の書棚のよく目立つところに、林陸朗先生の著された七冊本からなる『完訳注釈 続日本紀』（現代思潮社）を並べている。自身の研究者としての原点を思い起こさせてくれる書物だからである。

私がこの本と出会ったのは一九九〇年の夏、神田の古本屋街であった。まだ真新しく見えた白い表紙の全七冊は第一版と第二版が混じった状態で、古本屋の入り口付近のやはり目立つ場所にきれいに並べてあった。すぐに手にとりパラパラとめくると、宝物を手に入れたかのように慌ててレジへ運んだのを記憶している。その時の金額は忘れてしまったけれど、早稲田大学の学部四年生だった身には、かなり高い買い物だったはずである。けれども私は、卒論の準備が遅れていて少々焦っていた。本の噂を聞き、これさえあれば卒論が書けると勝手に思い込んで古本屋街をさまよっていたのである。しかしこの本との出会いが、卒論どころか、色々な意味で私の「将来」を決めるものとなっていった。

当時の私は、もともと歴史研究の道に進む気など全くなか

つたくせに、急に大学院への進学も頭の片隅で漠然と考え始めた頃だった。それまでは卒論のことよりも就職のことがばかりが気になっていたのだが、就くつもりにしていたあるメディア関係の企業に、ふとしたきっかけで疑問を持つようになり、突然、違う道を探してみたくなったのである。しかし史学科に在籍していたとはいえず、それまでの私は授業よりも「学外活動」に熱中する、典型的な不真面目学生だった。しかも史学科に入った頃はどちらかというと近代の移民史に惹かれていて、そこから遡るように卒論に選んだ古代史のテーマも、研究動向どころか基礎知識すら完全に欠如していた。だからそれはただの安易な「思いつき」でしかなかったのだが、あの時は、その大きな遅れをこの本で少しでも挽回しようとしていたのだと思う。何度も何度も読み返しては、自分の問題意識に従って『続日本紀』の条文を拾い、ノートに書き写し、拙いコメントをつけていった。最初はほとんど何も意味がつかめないままの作業であったが、林先生の丁寧な注釈に導かれ、少しずつ理解できるようになっていった。全くの独学に過ぎなかったが、それでも私にはこれが初めて真剣に取り組んだ史料講読の「授業」となった。俄作りの卒論の出来は当然ながら散々だったが、結局、そのまま古代史に引き込まれてしまい、実家にも周囲にも相談せぬまま、無謀にもただ勢いにまかせて國學院大學の林先生の門をたたいたのである。

こうして私は、書物を通してしか知らなかった林先生の『続日本紀』の演習にとうとう実際に参加できることとなった。そこには、独学とは比較にならぬ刺激が満載であった。演習での院生の報告の際、林先生は時々目を閉じておられることがあった。寝ておられるのかなと思うと「おそらく寝ておられる時もあったと思うが」、報告後はパッと目を開かれ、おもむろに、そして的確に問題点を列挙される。どうやらそれは、つまらない報告か、内容の薄い報告の場合に起こるのである。だから先生の表情をよく気にするようになったし、それが私にとっては良い緊張感にもなっていた。また、林先生、鈴木靖民先生のもとで毎週月曜日に開催される院生の研究会でも、諸先輩方において両先生からも厳しい指摘や意見が飛ぶ。ただ、研究会後の飲み会で、林先生はとても楽しそうに我々に色々な話をして下さった。戦時中、入隊先で防毒マスクをつけて走る訓練があったらしく、息苦しさからマスクの間に小枝を挟んで「ズル」をしていたことを、飲み屋の割り箸を使って「再現」して見せていただいたりもした。こうした厳しさや緩さの交じり合う学習環境だったからこそ、私たち院生は、甘えず、また萎縮もせず、互いに議論をしながら研究を深められたのだと思う。

けれども実は、この恵まれた環境にも、私は入学後しばらく、なかなか馴染めなかった。学部の間を怠けて暮らし

た当時の私には、学部生の時から林先生や鈴木先生のもとで鍛えられた國學院大學出身の同期生たちの知識量が、圧倒的に感じられた。ゼミや研究会では、それまで聞いたことのない用語や概念、研究者名や論文名が次々と飛び出し、目が回りそうであった。それでも何とかついていこうと、無理に発言をしてはみるものの、林先生からは、朗らかな表情のまま、その根拠の薄弱さや史料の知識の無さを厳しく指摘される。とても恥ずかしく、とにかく勉強しなければと思った。その際も、行き着く先はあの本なのである。再び何度も読み返す日々が続いた。コメントを付した手書きの史料ファイルは、どんどん分厚くなっていった。

その後、國學院の正倉院文書研究会に特別に参加を許していただき、林先生をはじめとする諸先生方、諸先輩方のもとで、さらに古代史料に関する知識やスキルを深める機会を得、それが後に自身のテーマ研究にも大いに役立つこととなった。けれどもこの研究会も、『続日本紀』の学びが基礎になればついていけなかったであろう。やはり、あの林先生の本との出会いが無ければ、と思うのである。

今、『元訳注釈 続日本紀』のページをあらためて開き見ると、私自身が引いたたくさん傍線があり、乱雑な文字の書き込みもあちこちにある。あれから三〇年近く経ったが、これほど繰り返し読み返した書物は他にない。自身も古代史研究者

になった今、本書がどれほど価値のある、また超人的労作なのかもよくわかる。そして、すっかり日焼けして書棚にならぶそれらを机から眺めると、朗らかで厳しい林先生と、そのもとであがいた大学院生時代の自分自身を色々と思い出す。だから、ふと迷った時に目に入る位置に、その七冊を並べているのである。

大学院を修了してから、林先生とお目にかかる機会は減り、特に最近はいさばらくお会いしていなかった。ただ時々、お手紙で近況などを色々と知らせていただいていたので、先生のお体のことだけが気がかりなまま時間ばかりが過ぎていた。だから、鈴木先生からのお電話で林先生ご逝去の第一報に接した時は、何とも悔しい思いであった。翌日は、予定していた調査のため、鬱々とした気分が長崎に入った。そこで私より一足先に到着していた調査本隊と合流すると、彼らは先ほどまで長崎歴史文化博物館で、林先生のルーツでもある唐通事林家に関する展示をたまたま見ていたのだという。この調査も林先生に導かれているような気がした。

今はただ、先生のご功績に深甚なる敬意を表しつつ、安らかに想われますよう心からお祈りいたします。

林陸朗先生の思い出

酒寄 雅志

二〇一七年二月十七日(金)、國學院大學名誉教授林陸朗先生が逝去されました。先生は丑年で、私の二回りの九十一歳でした。

私にとって先生との最初の出会いは、NHK教育テレビの小学校六年生向けの歴史教育番組「くらしの歴史」でした。「踊る大捜査線」の神田総一郎署長役で人気を博した若き日の北村総一郎氏らが出演したドラマ仕立ての番組に、先生ご自身出演され、歯切れの良い解説をされていました。高校生であった私はこの歴史教育番組を時折見ることもあり、お会いしたこともないにもかかわらず、先生は身近な存在でした。國學院大學入学後、初めて先生にお目にかかった折には大いに感動したものでした。先生は長く番組制作に関わっておられました。「くらしの歴史」の後継番組である「いっこく堂のんげん日本史」の監修を私に託され、現在放送中の中村獅童主演の「歴史にドッキリ」まで続くことになりました。

私が國學院大學に入ったのは一九七〇年ですが、先生は前年に『上代政治社会の研究』（吉川弘文館、一九六九年）を上